

Lead

All roads lead to the future リード

コミュニケーションペーパー

2019 夏号
Summer

No. 030

¥0

TAKE FREE

まなびの時間

人文社会科学部

遠隔地共同学習

キラ星高知大生

トビタテ！留学JAPAN

日本代表プログラムで海外へ

Action! 企業×高知大学

看護師の声を共同開発に活かす

がんばる!先輩

広報係とサッカー一部監督の

二刀流で大学の魅力を発信中

Kochi University Topics

〈特集〉

特集1／近未来のあるべき姿を探る

希望創発

センターの挑戦

特集2／広報顕彰制度で初表彰

研究内容を広く

情報発信！





希望創発センター長
地域協働学部 教授
いけだ ひろみ
池田 啓実

特集1 近未来の あるべき 姿を探る



2018年に誕生した「希望創発センター」。
「希望の名を冠したセンターの
役割とはいったい何なのか？」
設立からこれまでに今後の展開について、
池田啓実・希望創発センター長に
話を聞きました。

常識を疑うことから 生まれるものとは

希望創発センターは、産官学、文理、高知・東京等の協働による全く新しい希望創発エコシステム（生態系）の拠点。「希望をつくれる人材」の育成と、イノベーションの持続的創発のためのインフラ構築を目的に、学生と企業人がともに学ぶという全国でも珍しい取組です。

「希望創発センターのミッションは、常識を書き換えていくための環境整備です」と、池田センター長は設立の目的を話します。

「常識にとらわれていると新たな希望やイノベーションは生まれません。しかし、組織内にいると、外から見ればわかる矛盾にはなかなか気づかないものです。そこで、多様な人々が集まることで常識を書き換えることが成し遂げられるのではないかと、組織文化の異なる人たちが集える場を作りました」

学生と社会人が 対等・平等に学ぶ場

センターの活動に参加するのは、高知大の学生と教員、そして高知県内外から集まった企業の若手たちです。池田センター長によると、多様な人材が一堂に会することにより、大学や企業の常識を疑うことができる視点が生まれ、それぞれが属している組織の常識や物事に捉われなくなるなどのこと。学生と企業の人たちが対等・平等の立場で、ともに学び、考え、議論をするという、これまでどこにもなかった環境を高知大学のキャンパスに作り出しました。

なぜ、このような取組が生まれたのか、その背景について池田センター長は次のように語ります。

「大学の研究は近年、お金になるものだけが優先されつつあります。哲学をしながら、研究を通して、次代の担い手を育成することはかけ離れてきています。一方、変化の激しい時代においては、企業は自らの技術を使って未来社会に、真に必要なモノを如何に提供するかを考えなければなりません。しかし、現状では対応できる若手を育成できていない。こうしたジレンマのなか、大学も企業も、閉塞感を打破したいという思いを強く感じています。取組に参加している企業も、必要性を感じているからこそ、人材を送り込んでいるのです」



わざわざ参加する 研究会の魅力とは

希望創発教育研究の核になるのが、「希望創発研究会」です。大学3年から大学院生の学生と社会人が集まり、毎月1回土日2日間の例会を行います。例会では本学教員や大手企業のOBなどが講師のセミナーを開催し、参加者の学びを深めるほか、テーマ別に課題研究に取り組みます。

昨年度は「持続型・安全・安定食糧生産システムの開発と高知からの発信」「医療・介護分野での課題解決」さらに今年度は「明日の日本の姿を創る」を加えた3テーマを設定。各テーマとも5、6人のチームに分かれ、現場観察やディスカッションなどを行います。

「問われるのは、常識をいかに疑うかということ。問題を従来の思考で近視眼的に捉えるのではなく、より本質的で哲学的な議論が要求されることとなります。ある企業の参加者は、日常の思考行動とは異なる研究会活動は当初苦しかったと話してくれました。しかし、繰り返し実践することで、新たな視点で物事を

捉えられるようになったそうです」と池田センター長は話します。それゆえか、派遣費は企業の負担なのに、県内で1社純増の7社8名、県外は6社純増の19社20名と、企業も人も増加しています。また単位にはならない研究会に、学生たちも参加します。なぜ、参加者がこのように集まるのか。

「大学と企業の連携はよくありますが、この研究会のように、社会人が学生とともに本質的な学びのできる仕組みはほかにはありません。また、県外の企業は、高知という多様性を受け入れる土地柄に惹かれて参加している面もあるのではないのでしょうか。学生たちにとっては、

希望創発 センターの挑戦

本気で議論ができる場という魅力があると思います。深く考えたい、真剣にディスカッションしたい、という想いが伝わってきます」

将来の多様な社会の先取りとも言える、希望創発センターの斬新な取り組み。新たな学びとイノベーションのカタチとして、大きな可能性を秘めています。

希望ある未来。 その創発を、五感と 深い思索・実践の協働から挑む。



社会人 株式会社高南メディカル(高知)
小原 慶子さん



栄養士として病院で勤務しています。私自身、介護の大変さなどを経験したこともあり、医療と介護のテーマを選択しました。議論の中には初めて聞くような言葉もあり、私が参加してもいいのかわどしました。また、議論の内容に違和感を覚えても、なかなか口に出せない時期もありました。しかし、感じたことはメンバーに伝え

るべきと考え、皆さんに話したところ、受け入れていただきました。勇気をもって自分の意見を伝えることの大切さを学び、教員の皆さんのサポートもあって1年間続けることができました。研究会では、人の意見に耳を傾け、皆の共通認識にまとめることで課題解決が進んでいくことを経験しました。日々の業務でも実践していければと思っています。

社会人 株式会社カウネット(東京)
岡田 幸一さん



会社では9年間同じ部署にいて、外部研修に参加したこともなかったので、視野を広げてみてはと声がかかって参加しました。スマート農業をテーマに取り組みました。私のチームは社会人も学生も農業を知らない人ばかりでした。チームの中で考えていることがバラバラで、まずみんなでも農業を調べるところから始めました。チームでは、人がいないことをカバーするスマート農業が高知に入ってくるとどうなるのか、未来予想をしながら考えていきました。解決策を模索するなか、ひとつの案を考えても、本当にやらなければいけないこと、やりたいうことに立ち返ることで、違うアプローチができるようになったと思います。

学生 総合人間自然科学研究科
理学専攻(応用科学分野)修士1年
齊藤 愛梨さん



大学院では、あまり社会人の方と話す機会がないこともあり、就活の役に立てばと参加しました。メンバーはいろいろなバックグラウンドを持たれていて、研究会では自分では考えつかないようなことを聞け、とても興味深かったです。自分たちのチームでは、よさこい祭りや農業がテーマです。よさこいについては私もくわしいので、しっかりと意見が言えました。実際に農家の方に思いを聞いたり、次世代園芸ハウスを間近で見ることができたのも貴重な経験です。大学院の研究では、どうしても一点集中で周りが見えなくなり、意図地になってしまうことも多いのが欠点でした。しかし研究会に参加することで、考えに固執せず、発想を変えることの大切さを知ることができました。

2018年度の参加者の声

学生の学年表記は2018年度時点です。

学生 総合人間自然科学研究科土佐さきけプログラム
グリーンサイエンス人材育成コース修士1年
坂本 友樹さん



例会でのディスカッションだけでは考えをまとめる時間が足りなく、各自で課題についてネットや資料にあたって調べたり、現場でのヒアリングも行ったりしました。そのため、大学院の研究室との両立が大変でしたが、充実した1年でした。研究会では、社会の問題に対して仮説を立て、実際にヒアリングをし、日本の先端技術に触れることもできました。意識したのは、学生だからこそその意見を年上のメンバーにも委縮せずに発言すること。社会人の方も受け入れてくれると信じて、議論を活性化させることを心がけていました。中間発表で発表者をさせていただいたことも、いい勉強になりました。研究会に参加したことで、視野が広がったと感じています。

2018年度に制定された「広報顕彰制度」。記念すべき第1回の受賞者である先生方の広報活動、日ごろ取り組んでいる個性ある研究内容を紹介します。

広報顕彰制度で初表彰 研究内容を 広く情報発信！

● 広告顕彰制度とは

積極的な情報発信や創意工夫を凝らした取組を通じて、高知大学の広報活動をけん引する優れた活動を行った教職員等を学長が表彰し、広報マインドの醸成を図り、高知大学における広報活動の活性化と一層の発展に資することを目的としています。

第2回広報顕彰制度の授賞式は11月2日(土)開催のホームカミングデーにて執り行います。自薦、他薦を問わず、本学を退職又は卒業している方からの推薦も広く受付ますので、是非、ご応募ください。推薦募集要項等は、大学ホームページの「お知らせ」に掲載します。



新宿 高島屋イベント参加の様子



酒やパン、ヨーグルトなど、 一般に伝わりやすい研究を

農林海洋科学部で20年にわたり、積極的に広報活動を行ってきた永田信治先生。取り組むようになったきっかけは、当時の農学部がどういう学びの場なのか、一般の人にあまり知られていなかったことだといいます。

「広報活動を始めた当初は、農学部とは農家になる人が学ぶところだと認識されていました。もちろん、そうではなく、実際、私自身も農業をしたことはありません。この大きなギャップを埋めるには、農学部では何を学ぶことができるのか、そしてどのような人材を輩出できるのかを一般の人に広く知ってもらう必要がある」と永田先生は当時を振り返ります。永田先生の専門は微生物学。しかし、メインとする分子レベルの研究について情報発信しても、一般の人には理解しにくく、農学部の特色が伝わらないかもしれません。「パンやヨーグルトなどの馴染みのある素材を前面に出し、これらを作る

酵母や乳酸菌をテーマにしたほうが興味を持ってもらえるのではないかと考えて、わかりやすさを重視した研究を意識して行うようにしました。

現在、永田先生が注目しているのは、日本酒造りに使われる酵母。高知県の酒造産地は、地場の特徴的な酵母を使用しており、「その香りはワインを超えます。世界に通用しますよ」と話します。

永田先生によると、微生物を学ぶには、高知は絶好の土地とのこと。「山、川、海、すべての自然環境がキャンパスのすぐ近くにあり。生物に興味がある人なら、必ず何か面白いことが見つかりますよ」と力を込めました。

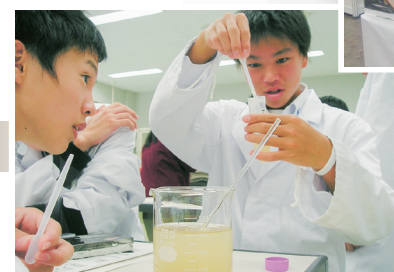
受賞者

農林海洋科学部 教授

なが た しん じ
永田 信治

選考理由

20年もの長きにわたり農林海洋科学部の広報担当者として積極的かつ創意工夫を凝らした取組を行い、産学官の連携につとめ、高知大学のブランド商品の開発・販売・広報に尽力し、大学の認知度およびブランド力の向上に貢献した。



高知県内の高校での体験実習

高校生を対象とする 科学のイベントを開催

理工学部の米村俊昭先生は2013年から、高校生向けのイベント「ひらめき☆ときめきサイエンス」を開催してきました。「ひらめき☆は科学研究費助成事業(科研費)によって得られた研究成果を社会に還元・普及させるのが目的。日頃、大学ではどういった研究をしているのか、研究のどこに面白さがあるのか、高校生に伝えていきます」と米村先生は話します。

「ひらめき☆で投げかけるテーマは、高知大学理学部が得意としてきた鏡像(光学異性体。同じ種類の原子が結びついているのにもかかわらず、構造が異なるため、互いに重ね合わせられない物質で、食品や医薬品の開発にも重要です。「例えば、メントールも鏡像異性体を持つので、爽やかな良い香りがするものと、薬品のような匂いがするものがあります。『ひらめき☆』では、これらの香りを嗅いで



分子模型の製作

受賞者

理工学部 教授

よ む ら と し あ き
米村 俊昭

選考理由

「ひらめき☆ときめきサイエンス」を中心に長年にわたり高校生向けの講座や活動を続け、高知県内外からの受験者獲得に大きな成果を挙げている。

確かめてもらいます。他にも鏡像異性体を持つ無機化合物(錯体)の分子模型を作ったべたり、回転すると光の通過が変化する偏光板を使うなど、五感で興味を持てるように工夫しています。開催日は毎年、オープンキャンパスの翌日。募集を開始して、一か月ほどで定員が埋まります。これが一番の励みになっていますね」と米村先生。装置や実験室の見学、大学生や先生と話ができる昼食クッキングタイムなども好評です。参加者からは「友人、先輩に紹介したい」「大学に進学して、化学を勉強したい」といった声が寄せられています。実際、参加者のうち毎年数名が高知大に入学しているとのこと、これも米村先生のやりがいになっているそうです。



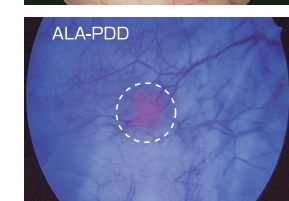
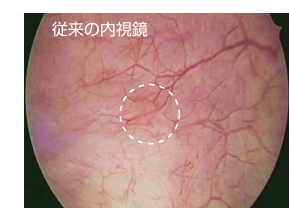
泌尿器のがんの 進歩する診断・治療法を伝える

泌尿器科のなかでも、がんを専門とする医学部の井上啓史先生。これまで主に2つの分野で、テレビや新聞などを通じて広報活動に取り組んできました。一つは、ロボット支援手術。保険適用とな

った2012年、この新しい方法に井上先生は取り組みました。「前立腺がんの場合、20年ほど前までは開腹手術が行われ、その後、腹腔鏡手術に移行しました。ロボット支援手術は、腹腔鏡手術をさらに進めたものです。以前と比べて、より細やかな縫合などが可能になりました」と井上先生は説明します。もう一つは2004年、井上先生が

脳腫瘍の診断方法から独自に取り入れ、全国で初めて行った光線力学による診断方法。「アミノレプリン酸」というアミノ酸をがん患者に投与し、青い光を当てると、がんの部分のみが赤く光るといった画期的な方法です。「内視鏡ではわからない部分を確認できるので、取り残しがないように手術することができると井上先生。

このように近年、がんの診断や治療方法は著しく進歩していますが、一般



アミノレプリン酸を用いた微小な癌の光線力学診断(ALA-PDD)



ロボット支援手術

受賞者

医学部 教授

いの う え けい じ
井上 啓史

選考理由

積極的な情報発信などにより高知大学の先進的医療を広く全国的に広報した他、県内での地道な医療・啓発活動など、県内外における高知大学の認知度、ブランド力の向上に貢献した。



インターネットで広がる海外大学との学びや交流 遠隔地共同学習

人文社会科学部・国際社会コース ゼミナール



(写真2)



(写真1)

進化する学習スタイル で深まる学びと交流

「Hello!」。インターネットでつながれたモニターのなかで、台湾・中国文化大学の学生が呼びかけます。その声に、人文社会科学部・国際社会コースの学生たちが応え、プレゼンテーションがスタート。多くの大学でインターネットを使った教育や研究が行われていますが、今井典子先生が担当するゼミナールでは、海外の大学生とともに学ぶ遠隔共同学習に活用しています。

例えばあるときの学習では、高知大の学生は、日本の教育システムや大学入試制度などについてプレゼンテーション。一方、中国文化大学の学生も、台湾での学校教育システムや入試などについて説明。英語力をつけていくためにはどうしたらいいのかをテーマに意見交換をしたそうです。他には、語彙習得に関するテーマもあがっていたそうです。

「学生たちにもつと英語を身近に感じられる機会をつくりたいと始めました。ゼミの研究テーマは、第二言語習得や英語教育。同じような研究をしている他国の学生と学び合い、英語で議論し合う時間を目指しました」と今井先生は取組の狙いを語ります。連携したのは日本と時差が1時間であり遠隔共同学習を行いやすい、台湾・台北市にある高知大学の協定校・中国文化大学。共に英語を第二言語として学ぶ相手とスタートしました。

2015年度から始まった遠隔共同学習では、ウェブ会議システムやSkype(スカイプ)を使って、互いに研究しているテーマを発表し合います。機器の設定や当日の司会進行などは、学生が主体となつて行われてきました。当初は双方の大学が交互に発表を行い、最後に質疑応答するという構成(写真1)。その後、学生がより主体となつて進行し、交流時間も十分持てるようにしようと、2018年度から小グループ編成や発表の仕方を変更(写真2)。例えば、昨年12月に行つた遠隔共同学習ではそれぞれ4〜5人のグループに分かれて発表しあう形式で実施しました。

「3年目から、事前準備にも工夫しています。学生たちは相手の学生と事前にメールなどをやり取りし、当日は研究内容のみに集中できるようにしています。時にはプレゼンテーションのスライドにも事前に目を通して、ディスカッションに参加しています」

また英語力の向上だけでなく、プレゼンテーションでの発表の仕方や資料スライドの作り方など、双方の学生が刺激し合い、さまざまな学びを得ているそうです。

今年2学期からは、中国文化大学との交流に加えて新たな取組も始まる、と今井先生。

「台湾・台中市の東海大学とも交流を始めます。本学と東海大学、日本の他大学が参加した3校をつなげた共同学習も行う予定です」
年を追うごとに進化をする遠隔共同学習。距離の壁を越える新しい学びのスタイルが、これからも学生たちを刺激します。



ゼミ学生の声

杉本渚さん(4年生):後列左

外国の学生と交流できる貴重な機会です。交流を通じて、相手に伝わる英語で話すことの大切さを学びました。

井手拓実さん(4年生):前列左

ネットでの交流を含め、ゼミはプレゼンの機会が多いので、どうすればより相手に伝わるかを意識するようになりました。

田野杏奈さん(3年生):後列中

今後は自分たちがグループリーダーになるので、堂々と意見を伝えながら、相手は何を言いたいのか聞き取る力も身につけたいです。

藤田鈴加さん(3年生):後列右

これからは言語だけでなく、文化的な背景もわかったうえで、異文化間交流としてコミュニケーションがとれるよう勉強していきたいです。

松田美紅さん(4年生):前列右

もともと人前で自分の考えを話すのが得意ではなかったのですが、ゼミの学びを通して発言力が伸びたと実感しています。



「高知でいえば、棚田が連なる中山間地のようなところでした。まずは村のことを知ろうと、毎日うろうろ歩き回って、農作業をやっている人にどんな品種をつくっているのか話を聞いて…。稲刈りなどの農作業を手伝ったりもしました。向こうはほぼ手作業で米作りを行っていて、とても新鮮でした」

村に入った当初はインドネシア語がままたまなかったため、アンケートを使って調査することを思い立ちます。練りに練ったアンケート用紙を農業を営む高齢者に見せたところ、「字が読めない」と返答が。高齢者の識字率が低く、アンケート作戦はあえなくとん挫するなど、調査は思うように進まなかったと言います。

「留学前に想像していたようには、いろいろなことがスムーズには進まず、落ち込むこともしばしば。そんなときはおいしいものを食べて、英気を養っていました。そして何より、現地の人たちがとてもフレンドリーで、僕を受け入れてくれたことがうれしかった」と佐々木さんは振り返ります。

時にはボゴール農業大学に戻って、調査を分析したり、大学の先生に連れられて現地の染め物「バティック」の生産者の聞き取り調査にも参加したそうです。稲作調査はレポートにまとめ上げ、大学で発表も行いました。「今回の留学で、ますますインドネシアが好きになりました。この経験を活かし、東南アジアの貧富の差が解決できるような起業を目指したいと思っています」と佐々木さんは次の挑戦を見据えていました。



さ さ き しゅう 農林海洋学部 4年 佐々木 周さん

宮城県出身。「今回の留学の経験を活かして、今、高知市でアジアの雑貨を扱うチャレンジショップを開いています。バティックも置いているので、これからもアジア各国の商品を増やしていきたいと思います」



学内外でキラッと光る
高知大生をピックアップ!

キラ★星 高知大生

トビタテ!留学JAPAN日本代表プログラムで海外へ

インドネシアの山村でホームステイ 米作りを体当たりで調査

自分のやりたいことができる留学支援に魅力

「トビタテ!留学JAPAN日本代表プログラム」は、海外留学にチャレンジしたい学生をバックアップする官民協働留学支援制度。意欲的な留学計画を選考し、留学費用などの奨学金を給付しようというものです。農林海洋科学部の佐々木周さんはこの制度に応募し、インドネシアへの留学を実現。11カ月の留学を終えて、今年1月に帰国しました。

佐々木さんをインドネシア留学に駆り立てたのは、大学1、2年生で経験した教育プログラム「SUIJI*」での体験。インドネシアと四国の大学生がともに双方の地域に滞在し、課題に取り組むプログラムです。「言葉の壁はありましたが、学生たちで毎日議論を重ねる濃密な時間がおもしろく、なによりインドネシアという土地の魅力にはまりました」と佐々木さん。さらにインドネシアでは、「トビタテ!」の給付を受けて留学しているSUIJIの先輩にも出会ったことから、同プログラムを利用して留学にチャレンジすることを決めたそうです。

佐々木さんが「トビタテ!」での留学を決めたのには理由があります。「留学プランを自分で設計できるので、大学の学びとは関係なく、自分のやりたいことができます。そこに交換留学にはない自由さを感じました」と佐々木さん。選考には、高知大の教員のアドバイスを受けながら独自に立てた留学計画書で審査に臨み、みこと約3倍といわれる倍率を突破しました。佐々木さんは大学を1年休学することを決め、2018年3月、インドネシアへと飛び立ちました。

うまくいかないこともある 厳しさの中にも喜びを見出す日々

佐々木さんの留学の目的は、インドネシアの山村における稲作の現地調査でした。もともと米作りに興味があって農林海洋学部に入ったこともあり、インドネシアはコメが主食なのでテーマとして最適だと考えたそうです。留学先はボゴール農業大学で、研究フィールドである山奥の農村で村長の家にホームステイし、インタビューを中心とした調査を行いました。

*SUIJI: Six University Initiative Japan Indonesiaの略称で、インドネシア3大学と四国3大学の6大学のコンソーシアム。熱帯地域における農業発展に関する教育研究を協働ですすめることを目指しています。

看護師の声を 共同開発に活かす

現場の声から
試作品づくり

「産学連携」「共同研究」といえば、大学の研究室などが関わるのが定番。しかし高知大学では、医学部附属病院の看護部も共同開発に取り組み、いくつもの製品を生み出しています。今年8月には、粘着テープ付きおう吐袋「Auto Catch」を発表。発売した看護師の西内さんは「何度も試作を繰り返した、愛着のある製品です」と話します。



看護部にしうち西内 まゆみ

アをどうにかしたいというのが、開発のきっかけです」と西内さんは話します。

製品開発にあたって最初に行われるのが、看護部の職員によるアイデア出しです。「こんな商品があればいいのにといいようなレベルでいいので、自由に書いてもらいます」と多田看護部長。その中から実現可能なアイデアを選び出します。

今回、選ばれた西内さんのアイデアは、職場である放射線部での悩みを解決したいという思いから生まれました。「IVR（画像下治療）に気分が悪くなり、おう吐をしてしまう患者さんへのケ

るので、試作品を実際に使用したりもしました。例えば当初の袋の形では漏れてしまうことがありましたが、袋の口を少し狭めることで防止できるようになりました」と西内さん。

「アップし、完成にこぎつきました。現場で実際に使ってみることで、わかることが多かったですね。私たち看護師は製品開発のプロではないので不安もありましたが、現場の意見を活かして改良を重ねることにより、少しずつ製品に自信が持てるようになりました」と西内さんは今回の経験を振り返ります。

アイデアが形になる喜び が仕事のモチベーションに

そもそも看護部がこのような取り組みを始めたのは、2011年のことでした。「当時の病院長が、看護師が欲しいと思うような製品を産学連携で共同開発してはどうかと、推進してくれました。病院長は現場のモチベーションを上げたいと常々考えられていて、共同開発もその一環だったのでしょう。また当時の看護部長がエネルギーシナの方で、まずはやってみよう、と前向きに取り組まれて開発が始まりました」と多田看護部長は共同開発のきっかけを話します。

最初に手掛けたのが、看護師が病棟を回る時に使用する医療用カートでした。省スペース化などさまざまな工夫を凝らし、2年の開発期間を経て完成。カートに続いて、車いすに連結できる点滴スタンドなどの共同開発を行い、「Auto Catch」は第5弾目の製品として完成しました。

泉株式会社
樹脂事業部東京樹脂課 担当課長
あべてるゆき
阿部 晃之さん



高知大学との共同開発で弊社は初めて医療機器分野に関わり、門外漢だったため、病棟や手術室などいろいろな医療現場を見学させていただきました。ここまでの関係性を持って共同開発をしているケースは珍しいと思います。このオープンさは高知大学ならではのようです。今後も看護部の皆さんのアイデアを、商品に活かすよう頑張ります。



最初に開発した医療用カート「特許第5717488号」

がんばる！ 先輩

社会で活躍するOB・OGを紹介

宮武 敢司 (24歳)

人文学部社会経済学科 2017年卒業



高知大学に入学した 理由は何ですか？

高校時代、サッカー部に所属していたので、大学サッカーの強豪だった高知大学を目指しました。ただ、高3の冬にひざを故障してしまい、入学はしたものの、サッカーを続ける気は無くなっていたのです。しかし、サッカー部に入っていた高校の先輩から誘われ、結局、入部することに（笑）。1、2年生はケガのりハビリで練習には参加できず、サッカー部が地域貢献の「環」で行っていたサッカー教室などに参加して子どもたちを教えることに熱中しました。そこで、指導者のおもしろさに目覚めたのです。

大学ではどのようなことを 学びましたか？

人と関わるのが好きなので、教員になりたいと思い、教職の勉強に力を入れました。私の学科では社会の免許しか取得できませんでしたが、さらに国語の免許も取るためにかなり多くの単位を取りました。また4年生の時は、現在、地域協働学部で学部長である上田健作先生のゼミに入ってフィールドワークを経験し、地域に入って活動することの魅力を知りました。大学4年間は学部の学びとサッカーで、本当に忙しい、充実した時間でした。

卒業後の進路について 教えてください。

4年生の時にサッカー部を通じ、四十町の地域おこし協力隊の話がいたできました。サッカーを通して子どもたちの育成を目的にしたもので、これまでのサッカーの経験を活かして地域で活動できることに魅力を感じ、着任しました。町内のサッカークラブの指導を行ったり、小学校の体育の授業でサッカーの指導を行ったりしました。

じつは、卒業後も高知大学サッカー部に関わりたいたいと思っていましたので、高知県内で就職できることも着任を決めた理由です。協力隊の活動の合間に、1年目はコーチとして、2年目からは監督としてサッカー部を指導してきました。しかし、外部からのサポートでは十分ではないと感じていましたので、この春から大学職員としてより近くでサッカー部をサポートすることに決めました。現在は総務部総務課広報係で、広報のためのさまざまな仕事に取り組んでいます。



国立大学法人高知大学
総務部 総務課 広報係
みや たけ かん じ
宮武 敢司

香川県出身。2013年高知大学に入学。サッカー部に入部し、選手としての活動のほか、高知大学少年少女サッカー教室での指導などに従事する。卒業後は四十町地域おこし協力隊に着任するとともに、高知大学サッカー部のコーチを務め、18年には監督に就任。19年、高知大学の事務職員に採用され、現職。

広報担当として、 何を目指していますか？

今は仕事を覚えることにいっぱいですが、高知大学は本当にいい大学なので、どんどん情報発信したいと思っています。卒業後の2年間、学外で働いて感じるのは、高知大学の情報が意識しないと入ってこなかったことです。多くの皆さんに自然に大学の魅力に触れてもらえるよう、SNSなどを駆使して広報していきたいですね。

キャンパスライフと言アドバイス

なんとなく大学生活を送るのではなく、4年間、熱中できる何か特別なことを探すのをおすすめします。サークルに打ち込むのもいいし、授業オタクになるのもいいと思います。漠然と大学生活を送るのはもったいないですよ。



『学生空間「One step」』オープン



利用する大学生



カフェ『学生空間「One step」』

高知県内の中小企業と大学生のマッチングを支援するためのカフェ『学生空間「One step」』が、4月1日、高知大学朝倉キャンパスから徒歩5分の場所にオープンしました。

30席ある店内では、学生が無料でWi-Fi、ドリンク等が利用できるメリットがある一方、『学生空間「One step」』を支援するスポンサー企業は学生との交流を通じた企業PRができます。この『学生空間「One step」』は、「高知の学生は必ずしも都会に就職したいとは思っていない」という地方創生推進士（地域で貢献したいという学生に与えられるCOC+事業のなかで誕生した称号）の学生の声を基に、株式会社オフィスパートナーの田村社長が企画し誕生しました。

国際シンポジウム『IoP (Internet of Plants) が導く「Next次世代型施設園芸農業」への進化』を開催



北野雅治教授による基調講演



高知大学朝倉キャンパス会場199名参加

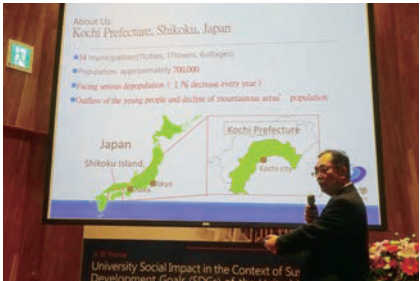
高知県が内閣府（平成30年度地方大学・地域産業創生交付金）に採択され、高知大学が参画機関として地域の中核的産業振興や人材育成を進めている産学官プロジェクト『IoP (Internet of Plants) が導く「Next次世代型施設園芸農業」への進化』の一環として、3月16日に国際シンポジウムを朝倉キャンパスで開催し、高等教育機関や農業関係者、企業関係者、行政関係者等199名が参加しました。

シンポジウムでは、IoPプロジェクト中心研究者である高知大学の北野雅治特任教授による「IoPの挑戦：高知の施設園芸の革新にむけて」と題した基調講演が行われたほか、IoPスーパーバイザーである株式会社日本総合研究所創発戦略センターエクスパートの三輪泰史氏による「IoT・AIが拓く次世代農業～スマート農業時代におけるデータ活用戦略～」と題した招待講演及びオランダ王国大使館農務参事官のエバートヤン・クライエンプリnk氏による「オランダにおける施設園芸の現状と未来」と題した招待講演等が行われ、盛会のうちに幕を下ろしました。



エバートヤン・クライエンプリnk氏による招待講演

櫻井克年学長が『2019年大學社會責任校長論壇』(台湾)で基調講演



5月13日、台湾の亞洲大学で開催された『2019年大學社會責任校長論壇』に櫻井克年学長が参加し、高知大学の地域連携・社会貢献に関する基調講演を行いました。台湾行政院は2019年を「地方創生元年」と定め、地方政府や産業界、そして高等教育機関等が連携した取組が加速しています。同シンポジウムでは、台湾、イスラエル、インドネシア、インド、ポルトガルから集まった大学学長らと「地方創生」をテーマにしたディスカッションが行われ、学生の活力を「地方創生」と結びつけていくことで共通認識を深めました。

絶滅したと考えられていた甲殻類『オオスナモグリ』を教育学部の伊谷行准教授が発見！！



2016年2月に土佐市の干潟で、教育学部の伊谷行准教授と、当時、黒潮圏総合科学専攻に在籍していた邊見由美さんが捕獲し標本にした甲殻類が、絶滅したと考えられていた『オオスナモグリ』であることが分かりました。『オオスナモグリ』は固いハサミを持つ甲殻類で、関東の太平洋側から沖縄にかけて50年から8万年ほど前の地層で化石が確認されているだけで、絶滅したと考えられてきた生物です。2017年3月には静岡県の研究者により沼津市の干潟でも捕獲され、分析を行った千葉県立中央博物館の研究員、また、海外学術誌に論文を提出した際に助言のあった化石研究者を加え、5名の研究者の連携が、この奇跡の発見を生みました。

理工学部防災工学実験棟が完成



この度、朝倉キャンパスの理工学部棟2号館南側に、防災工学実験棟が完成しました。

建物内には斜面防災工学実験室、構造工学実験室、構造動力学実験室、地盤防災工学実験室、防災水工学実験室の5つの実験室があり、現在、各種設備の設置等を順次すすめているところです。学生たちはここで、各種基礎試験や演習を行い、講義系の授業で修得した理論や知識の復習とそれらの実感を伴った理解を深め、チーム内で協調して作業する能力や論理的なプレゼンテーション能力を修得していきます。

アイルランド王立外科医学院バーレーン医科大学長及び最高執行責任者が医学部附属光線医療センターを表敬訪問



共同研究調印式・記者会見



光線医療センター実験室視察

5月16日、アイルランド王立外科医学院バーレーン医科大学 オトゥーム医科大学長、マーフィールド最高執行責任者が、高知大学医学部附属光線医療センターを表敬訪問され、アイルランド王立外科医学院バーレーン医科大学との「学生交流」及び「国際共同臨床試験」に向けてのミーティングを行い、光線力学診断に関して新たに内視鏡による胃がん診断などを行う共同研究に関する調印式を行いました。今後、共同研究の他にバーレーンに今秋開設される「がんセンター」での人材育成や「交換留学」も開始する予定です。

学生団体『さきはま大好きクラブ』が室戸市佐喜浜ガイドブックを作成



高知大学コラボ工房プロジェクトに参加した学生団体『さきはま大好きクラブ』が、自主制作したガイドブックを、4月8日、室戸市役所に贈呈しました。佐喜浜の魅力的な自然や文化、素敵な人々をたくさんの人に教えたい！との思いから立ち上がった学生団体『さきはま大好きクラブ』。「佐喜浜ってこんなところ」見る・遊ぶ「歴史探訪」「八幡宮大祭」「食べる」「フォトギャラリー」といった構成のガイドブックは、人口1,500人ほどの室戸市佐喜浜地区の魅力を学生目線で伝えています。

学生とランチで懇談『学長めし』



普段、学長と直接話をする機会がなかなか無い学生たちに、大学の生協食堂で学長とランチを共にしてもらい、「食」を通じた交流が風通しの良い大学づくりの一役を担うことを期待し平成25年度に始まった『学長めし』。今年度も、学生たちが櫻井学長を囲み、毎月、ざっくばらんな会話で楽しいひと時を過ごしています。

5月24日の『学長めし』に参加したのは、留学推進団体LINK所属の学生6名。メニューは櫻井学長自らが選んだ「鶏肉のカレーパン粉チーズ焼き+小鉢セット」が用意されました。

地域連携コーディネーター4名の編著『地域コーディネーションの実践～高知大学流地方創生への挑戦～』が刊行



写真左から
梶英樹講師
赤池慎吾准教授
大崎優講師
櫻井学長

高知大学地域連携コーディネーターである赤池慎吾准教授、大崎優講師、岡村健志准教授、梶英樹講師の5年間の活動記録をまとめた書籍が完成し、6月10日に販売開始となりました。

文部科学省が平成25年度に開始した「地（知）の拠点（Center Of Community:COC）整備事業」。大学が地域社会と連携し、大学資源による地域課題の解決を目指し、地域振興策を共同実施することの事業に、高知大学が提案・採択されたCOC事業「高知大学インサイド・コミュニティ・システム（KICS）化事業」によって採用された4名の地域コーディネーター。本書はこの4名の5年間の奮闘記です。

高知大学と梶原町が連携に関する協定を締結



櫻井学長（左）と吉田梶原町長（右）

高知大学と高知県梶原町との連携協定調印式が、5月10日に梶原町雲の上の図書館で執り行われました。高知大学と梶原町は、これまでに出前公開講座を中心とした生涯学習事業で連携を深めてきましたが、今回の連携協定締結により、梶原町総合振興計画の策定、梶原高校の魅力化、多様な学びの場を創出することによる、持続可能な“ゆずはらづくり”に大学ならではの知見を活用して相互に発展していくことを目指します。また、梶原町職員1名を「自治体連携コーディネーター」として高知大学次世代地域創造センターに受け入れます。

高知大学から学生支援のお願い

■高知大学修学支援基金

本基金は、修学意欲を持ちながら、厳しい家計状況により修学困難な学生に対して給付する奨学金として活用します。

〈お問い合わせ先〉 高知大学総務部総務課

TEL:088-844-8100 FAX:088-844-8738 E-mail: sj02@kochi-u.ac.jp URL: http://www.kochi-u.ac.jp/

■高知大学さがけ志金

高知大学の理念である『地域社会及び国際社会に貢献しうる人材育成と学問、研究の充実・発展を推進する』ため、これらに対する事業の支援とその環境の更なる整備・充実を図ることを目的とします。

【対象者】
本資金の趣旨に賛同いただける個人・法人・団体等

【金 額】
個人による寄附金につきましては、1口1千円を単位とします。法人・団体等による寄附金につきましては、1口1万円を単位とします。支援とその環境の更なる整備・充実を図ることを目的とします。

本志金の趣旨をご理解いただき、なにとぞ複数口でのご協力をお願いします。

「高知大学修学支援基金」及び「高知大学さがけ志金（教育・研究・社会貢献活動による支援）」に寄附を行う際に、インターネット決済サービスによる「クレジットカード決済」、「コンビニ決済」、「Pay-easy決済」がご利用いただけます。

■高知大学古本募金

読み終わった本で高知大学をご支援ください。高知大学古本募金は、皆様から読み終えた本・DVD等をご提供いただき、その査定換金額が高知大学に寄附される取組です。古本募金を通じて集まった寄附金は「高知大学さがけ志金」として受け入れ、本学の教育研究・社会貢献活動の向上のために役立てられます。

〈お問い合わせ先〉

☎0120-29-7000（受付 9:00～18:00）

高知大学古本募金 検索 運営協賛：古本募金さきやぼん(嵯峨野株式会社)

オープンキャンパス 2019

朝倉キャンパス



8月3日(土)

人文社会科学部 10:00~15:00

コース紹介／模擬授業／教員と学生の交流会／相談コーナー／
キャンパスツアー（詳しくは、人文社会科学部ホームページを
ご覧ください。） <http://jinbun.cc.kochi-u.ac.jp/>

理工学部 10:00~15:00

学部紹介／学科構成と入試概要／わたしの大学生活（先輩の話）／
パネル展示と入試相談コーナー ※理工学部1・2号館、情報科学棟、
地震観測所、水熱化学実験所（附属施設は自由に見学できます。）

8月3日(土)・4日(日)

地域協働学部 10:00~15:00

学部説明／学生による学びの紹介／入試概要説明・相談／演習体験
／学生との交流（両日とも同じ内容です）

8月4日(日)

教育学部 10:00~15:00

入試と学部の説明会／進学相談／各コース企画（コース紹介、ミニ
講義等）

全学企画

保護者向けガイダンス

就職・奨学金・授業料免除関係の
説明を行います。／なんでも相談
コーナー／寮見学／男女共同参画
でさめく未来コーナー／障がい
学生サポート・修学サポート相談

岡豊キャンパス



8月4日(日)

医学部 13:00~16:30

医学科紹介／附属病院の紹介／模擬授業／教員・在学生への質問
コーナー／◎研究室見学◎スキルスラボ実習体験(◎はホームペ
ージから事前予約が必要です)

看護学部 9:45~12:00

看護学科紹介／カリキュラム説明／台湾大学短期留学体験談／実
習室見学・体験／教員・在学生への質問コーナー

物部キャンパス



8月4日(日)

農林海洋科学部

個別相談／学部説明／学科紹介／ラボツアー／専攻領域・コース説
明／実験室・研究施設見学／日章寮(男子学生)見学ツアー／在学生
による学生生活紹介

Event Calendar

8月

10日(土)・11日(日) ●朝倉キャンパス

よさこい祭り

今年もよさこい祭りに高知大学の学生チームが登場。業
雲、粋恋、旅鯨人、響、南冥寮、日章踊り子隊、炎が参加予
定。ぜひ、応援をお願いします。

10月

12日(土)・13日(日) ●岡豊キャンパス

第39回 南風祭

医学部の学生が色々な楽しいイベントを企画します。今年の
学祭もよろしくお願いします！

11月

3日(日) ※予定 ●物部キャンパス

物部キャンパス一日公開

地域の特産品、農作物の販売や人気のトレーラー体験コー
ナーをはじめ、大学を身近に感じられる催しが一杯です。お誘い
合わせの上、是非お越しください。

2日(土)・3日(日) ●朝倉キャンパス

第70回 黒潮祭(大学祭)

今年も沢山のイベントを企画して、皆様の来校をお待ちして
います。

2日(土) ●朝倉キャンパス

第11回 ホームカミングデー

今年も、黒潮祭と同時開催です。卒業生の皆様の多数のご参
加をお待ちしています。



よさこい学生チーム旅鯨人

物部キャンパス一日公開



●お問い合わせ先 皆様からのご意見・ご感想をお待ちしております。



高知大学
Kochi University

高知大学総務課

高知大学

検索

<http://www.kochi-u.ac.jp/>

バックナンバーは
こちらから
ご覧いただけます。



TEL.088-844-8643 FAX.088-844-8033

〒780-8520 高知市曙町2-5-1 E-mail:kh13@kochi-u.ac.jp

THE こうちユニバーシティCLUB ラジオ FM高知(81.6MHz) 毎週日曜日(9:30~9:55) 放送中

高知大学の教育、研究、地域貢献等の最新情報をラジオでお届け。
高知大学のHPまたは番組ブログで過去の放送も視聴することができます。

WIZ RADIO (ラジオ視聴用の無料アプリ)をダウンロードいただくとFM高知の放送が全国どこでもスマホで視聴できます。

【スポンサー企業】ソフテック

※誌面の学年と役職は制作時のものです。